

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (人間健康科学)	氏名	近藤めぐみ
論文題目	Growth Experience Bereaved of a Spouse by Cancer: Relying on Merleau-Ponty's Reorganization of the Body Schemes (がんで配偶者を亡くした遺族にとっての成長経験:メルロ＝ポンティの 身体図式の組み換えに依拠して)		
(論文内容の要旨)			
<b>【背景】</b> 大切な家族、特に配偶者を亡くした遺族は、抑うつ症状を示すことや複雑性悲嘆に至ることも多い。これらの現象について、先行研究では主に悲嘆からの回復についてストレスモデルを用いた検討がなされてきた。一方で、遺族にとって悲嘆は肯定的な変化をもたらす体験となり得ることが指摘されるようになり、心的外傷後成長との関連が注目され始めている。心的外傷後成長には人生の物語の明確な変化が必要であることが示唆されているが、がんで配偶者を亡くした遺族(以下、遺族)を対象として、この点を明確にした研究は未だ乏しい。遺族の心的外傷後成長について理解を深めるためには、遺族の人生の物語の変化つまり遺族にとっての心的外傷後成長(以下、成長)とはどのような経験か、そのあり様を明らかにすることが求められる。 そこで、新たな環境へ適応する際に習慣の組み換えに着目するメルロ＝ポンティの身体論から着想を得て、遺族にとって成長はどのような経験か、遺族の成長のあり様を習慣の組み換えの視点から現象学的に検討した。			
<b>【方法】</b> 本研究は質的帰納的研究である。21名(男性8名、女性13名)の遺族を対象にインタビュー調査を実施した。本研究では遺族にとっての成長の意味を明らかにする必要があることから、現象学的分析を選択した。分析は看護学だけでなく哲学の専門家にもスーパーバイズを受け3名で実施し、遺族の習慣、習慣による意識・知覚/行動、習慣の組み換えのきっかけに着目し、習慣の組み換えの視点から遺族の成長のあり様を捉えた。さらに、結果の妥当性を高めるために、トライアングレーションを意図して、捉えた成長のあり様が了解可能であるかについてグリーフケアに携わる心理学や医学の専門家より助言を得た。			
<b>【結果】</b> 参加者の平均年齢は70.5歳、死別からの期間は11か月～8年であった。習慣の組み換えの視点から捉えた遺族の成長のあり様は、3つの局面からなるプロセスとして立ち現れた。初めに、遺族は生前の配偶者への病名・予後告知または死別により新たな環境に追いやられると、配偶者との習慣を問われ、習慣を意識する。次に、意識した習慣について自問することを通して、配偶者との繋がりを再認識し、それが心の支えとなることに気づき、習慣の組み換えが起こる。最後に、習慣が組み換えられることにより遺族は今の自分に納得し、新たな環境に適応する。 さらに、遺族の成長プロセスは歩み方によって3つに分類された。一つ目は生前の配偶者への病名・予後告知および死別をきっかけに習慣が問われ、死別後に配偶者との繋がりの再確認を経験する歩み方、二つ目は死別をきっかけに初めて習慣が問われ、配偶者との繋がりの再確認を経験する歩み方、三つ目は生前の配偶者への病名・予後告知をきっかけに習慣が問われ、死別前に配偶者との繋がりの再確認を経験する歩み方であった。			
<b>【考察】</b> 遺族の成長のあり様は3つの局面からなるプロセスとして立ち現れたことから、成長において死別前の経験は死別後の経験に影響する可能性が示唆された。さらに、成			

(続紙 2 )

長プロセスの歩みが3つに分類されたことから、成長には「死別前から始まる成長」、「配偶者との繋がりの再確認が心の支えとなることへの気づきの必要性」、「死別後へ影響する死別前の経験」の3つの視点があると考えられる。以上のことから、既存モデルでは示されていない成長の新たな視点を見出した本研究は、遺族ケアを発展させていく上で意義があると考えられる。
(論文審査の結果の要旨) 悲嘆は遺族に肯定的変化をもたらす体験となり得るが、がんで配偶者を亡くした遺族の心的外傷後成長の実態は十分に明らかにされていない。本論文は、新たな環境へ適応する際に習慣の組み換えに着目するメルロ＝ポンティの身体論から着想を得て、遺族にとって成長はどのような経験か、遺族の成長のあり様を習慣の組み換えの視点から現象学的に検討した。 対象者はがんで配偶者を亡くした遺族21名で、習慣の組み換えの視点から捉えた遺族の成長のあり様は、3つの局面からなるプロセスとして立ち現れた。初めに、遺族は生前の配偶者への病名・予後告知または死別により新たな環境に追いやられると、配偶者との習慣を意識する。次に、意識した習慣について自問し、再確認した配偶者との繋がりが心の支えとなることに気づき、習慣の組み換えが起こる。最後に、習慣が組み換えられると遺族は今の自分に納得し、新たな環境に適応した。また、プロセスの歩み方は遺族によって異なり3つに分類された。上述より、遺族の成長は「死別前から始まる成長」であり、成長には「死別後へ影響する死別前の経験」や「配偶者との繋がりの再確認が心の支えとなることへの気づきの必要性」があることが新たに見出された。 以上より、本論文は心的外傷後成長の既存モデルでは示されていない遺族の成長の新たな視点を見出し、未だ十分に整っていない日本における遺族ケアの発展に寄与するところが大きい。 よって、本論文は博士(人間健康科学)の学位論文として価値あるものと認められる。また、2023年5月30日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公表可能日: \_\_\_\_\_ 年 \_\_\_\_\_ 月 \_\_\_\_\_ 日以降